

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 志賀直哉 『網走まで』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字程度で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)

志賀直哉 『網走まで』



第 398 回の YouTube 読書会の課題図書は、志賀直哉の『網走まで』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『網走まで』志賀直哉 感想文

「網走」まで行く親子連れ。誰に逢いに行くのか、父は警察官であるのか、はたまた囚人に堕ちてしまったのか。網走という響きから、読み手にも想像が大きく膨らんで行く。

作者であろう「自分」。

その視線は、色白の若い母親の仕草と二人の子への温かい眼差しへ向けられ、その静かな観察が作者らしい。

改札のシーン、切符を切る鉄の音、混雑する人の流れ、上野の中央口を思わせるセピア色の情景が思い浮かぶ。その文調が素晴らしい。

耳と鼻に綿を詰めている男の子。耳と鼻が悪い。そして「つむり」、頭の働きまで鈍いことを、父の大酒が原因と医者が言うのは少しおかしいと母は語る。

そんな親子を前に、志賀の視線はあくまで優しい。

電車に乗っていても、この人たちには皆目的地があり、どこかにたどり着く。空虚に思える顔、思い詰めた顔から想像を巡らす瞬間がある。

(引用はじめ)

「自分は両親に伴われた子を――例えば電車で向かい合った場合などに見る時、よくもこれら何の類似もない男と女との外面に顕(あらわ)れた個性が小さな一人の顔なり、身体つきなりの内に、しっとりと調和され、一つになって居るものだと云うことに驚かされる」(新潮文庫 p.31)

(引用おわり)

他人の二人が調和された一つの人間をつくる不思議さ。さらっとした文章だが、素直な視点が意外で面白い。

母の謙虚さからは感じられない、嫌な感じできつい物言いをする男の子から、その父を想像しいつかこの父と子に母は殺されるという考えにまで至る。

それほどに、この男の子に強い嫌な印象があったと思うと、あながちその直感のようなものは当たっていたかもしれない複雑さも孕んでいたのだ。

小説家として何かを悟る直感は鋭いのだが、あまりの飛躍がなんだか真実味を帯びてくるのが面白いところだ。

私は現在入院している。大病ではないので何れ退院する。

看病する側もされる側も、発する要求、看護する様子、そのひとつひとつから、その人がどう生きてきたかが透けて見えることがある。

あまりに理不尽な要求をする患者には深い心の傷を感じ、あくまでも謙虚で居続ける人からは丁寧な自己規律を感じる。

人の内面、背景にあるもの、深い事情、驚くほどに感じてしまうようなデリケートな部分に触れてしまうのが、ここ、病院だ。

そこがこの物語にとっても重なった。

私もきっと看護師に見透かされているにちがいない。

（おわり）

『網走まで』 感想文

最初読んだ時は、え！ これで終わり？ と少し戸惑いました

宮澤さんの朗読を聴かせていただいて、自分でももう一度読み直してみて、やっと少し感想文かけるかなと思いました。

お母さんと一緒に男の子が、鼻と耳に綿が詰められているという、冷静に考えたらかなり不快な感じでいなきゃいけないなら、これは可哀そうだし、わがまま言うのは仕方ないなと思いました。

それでなくても男の子はじっとしているわけもなく、ぐずったりと親はほんとに大変だなと、昔、甥っ子が小さかった頃を思い出しました。

お母さんも疲れていたかもしれないし、品のある人なのかもしれないけど、怒り方もやさしいなって思いました。

誰でもそうかもしれないけど、最初は一応優しく言うけど、全然言う事きかないから、だんだん声が大きくなって、しまいに怒鳴って、最終的には手が出そうになる。

でも、この女性はそんな感じもなく、もしかしたらそんな事も通過ぎての今かもしれないけど、もし私も出会ったら、無事に着いてほしいと思うのと同時に、あまり無理しないで、頑張って！ って思うかな。

車の中の一時の出会いだけど、色々考えさせられるし、こんな感じの事あるなと思わせてくれる作品だったなと思いました。

作者の志賀直哉先生はどんな事を思って書かれたのかは分からないけど、読書会で少しでも分かればいいなと思いました。

(おわり)

志賀直哉『網走まで』感想文

志賀直哉先生は、人間観察能力が著しく高いお方なのであろうか。東京から知人の家へ赴く道の途中、ちょっとした電車内での閉ざされた人間模様と自身の観察眼に感嘆するばかりである。車内での子連れの母子の牧歌的だが、少し悲哀のある雰囲気を見事に表現している。志賀先生は母親とその子どもの立ち振る舞いから、父親の人となり、真偽は別として想像できてしまうあたり、作家としてのたぐいまれなる才能の一つであらうか。

志賀先生による父親の人物像は、同級生にいた貴族のボンボンの放蕩息子の人格であるが、おそらく網走まで渡って事業を起こしているのではあろうか、それとも刑務所でお世話になっているのだろうか。いいとこの坊ちゃんの出自と、ガキ大将的な傍若無人を男の子の立ち振る舞いで想起したのだ。今でも、志賀先生が描き出した人格の男は、そこら中にいるだろう。社会のしきたりやルールの圧力には手が負えないが、自分自身で共同体や社会を思うがままに作り出そうとして、己のルールで周りを固めたい欲求のある男だ。その理想に振り回される妻と子どもというのが、電車内という狭い空間において表現されていることに、感心せずにはいられない。

印象に残ったのは、母親が赤ん坊に電車内でお乳をあげる場面である。昔、テレビで、中村勘三郎であったらうか、誰か忘れたが、歌舞伎の演劇中に歓談している聴衆の中に赤んぼ連れの女性があり、その子が泣きだしたので、さっと自身のお乳を飲ませながら、じっと自分のほうを見ていて、役に集中できなかったと話していたのを思い出した。公共の場で自然と授乳する光景というのは今はほとんど見かけない。公序良俗の面を考えて、駅やデパートなどで授乳室をこしらえている現状である。昔は牧歌的なおおらかさがどこかにあったのであろうが、現代はいわゆる「はしたない」あらゆる行為が蔓延しないように、お上が先回りしてお触れを回したり、設備を整えたりしている。治安の良さと社会のおおらかさは幾分反比例するものであると思った次第である。

(おわり)

志賀直哉『網走まで』感想文

子供たちの世話をする母の忙しい様子が生き生きと描かれる。親子は網走まで辿り着けるのか。これから数日続くであろう道中の不安を隠して微笑む母。甲斐甲斐しく子供達に接する女が健気で光ってみえた。

男が色々この親子を憐れなものに想像するけど、母の機嫌は良い。男の優越目線。映画『国宝』を観た。この男は吉沢亮さんみたいな美男かも。だから女は機嫌が良い。

「赤児も葉書もまかされるし、ジロジロみても許されるねん俺。」

『三四郎』冒頭汽車で出会った女を思い出す。風呂に入ってきたり、敷布でこしらえた結界的なもの越しに一緒に寝た挙げ句、捨て台詞を言われた三四郎。

着物描写を想像するのは楽しい。縮緬の単衣に御納戸色の帯を締め、赤子をあやす礼儀正しい女。私が手元に置いている染織史家の吉岡幸雄(さちお)さんの『日本の色辞典』より納戸色。

(引用はじめ)

わずかに緑味のあるくすんだ青色。江戸時代に生まれた色名と思われ。由来は一に納戸(物置)の暗がりを表すような色。二に納戸入口にかける垂れ幕の色によく用いられたため。三に将軍の金銀や衣服、調度の出納を担当した御納戸方(役)の制服の色であったから。いずれも定かではない。

錆納戸、藤納戸、鉄納戸、納戸茶、納戸鼠などこじつけとも思われる色名も生まれるほどもてはやされた。

(引用おわり)

藍に、暗くない緑を少しだけ重ねた色彩で想像した。ちなみに『三四郎』では、「どこの馬の骨だか分からない」汽車の女の着物描写は無かった。

顔色が悪く頭の鉢の開いた耳と鼻に綿を詰めている威勢のいい、眉の間にしわを寄せて生意気言う滝さんが可愛い。宮澤さんのえなり君で再生不可避。赤ちゃんの下歯茎に二つ並ぶ小さな歯の可愛さを思い出した。「妙な子」「自分は嫌な気持ちしがした」という男のテンションがそれらを引き立てる。淡々と描写された文章は、書かれていない感情を読者に自然と湧き上がらせる。子供の可愛さを、無邪気で癒されるとか、腕がちぎりパンみたいでたまらん～。とか言わせていたら、駄目ゼツタイ。私も筆者のような冷静なところが欲しい。

放って置けない。この親子とせめて青森まで一緒にいたい。

(おわり)

『網走まで』 感想文

都会に住んでいると、あまりにも人が多いので、電車や道の移動中でも、なるべく人の事を見ないようにしている。人の事を観察する暇も無いのだが、目が合っても嫌だし、失礼な感じがするから、というのが多い。

けれど、旅先で出会ったりする人の事は、見る余裕もあるし、もう二度と会わない人と思えば気も楽になって、話しかける事が出来るし、意外とその人の事について、そのロケーションと共に、後々にも思い返してみたりする事がある。

「網走まで」の主人公も、旅先での一場面に出会った、少し年上の女とその子供達をよく観察し、思いを巡らせている。

明治40年くらいで網走と言えば、監獄しか思い付かない。夏の暑い時期なら、汽車もやっとその辺りまで開通していたようだが、なんとか行けたであろう。

当時、北海道開拓の為監獄を作って、囚人に道路開削の強制労働をさせていたようだ。

子連れの女は、端々に悲しげな顔の印象があるが、私は、大酒する夫の要請で、監獄の関係者(囚人か施設関係者かは分からない)への接見を頼まれているものと予想した。

ほんの2、3時間の出会いから、女や子供達、その夫の過去や未来までも考えさせられて、面白い作品だった。

(おわり)

行間にあらわれる心の機微

『網走まで』は、大きな事件が起こる作品ではない。列車の中という限られた空間で、母親と子ども、そして偶然乗り合わせた「私」との間に生まれる、ほんの小さな出来事が描かれているだけである。

しかし、その「小ささ」の中に、人間の心の機微が驚くほど細やかに描かれている。

特に印象に残ったのは、「私」が母親から託された葉書に対して抱く感情である。本来なら見てはいけない。しかし、少しだけ見たい。そんな、ほんのわずかな揺れが描かれている。

葉書には、男の名前と女の名前、東京の住所らしきものが少しかだけ見える。

すると読者も、「この人たちはどんな関係なのだろう」「夫はどんな人なのだろう」と想像してしまう。

もちろん、深く踏み込んではいけない。しかし、人は他人の人生の断片に触れた時、どうしてもその向こう側を想像してしまう。そこに、人間らしさがある。

興味深いのは、主人公が最後まで深く立ち入らないことである。葉書の内容をすべて読むわけでもなく、母親の事情を聞き出すわけでもない。ほんの少し気になる。しかし、それ以上は踏み込まない。その「止まり方」に、この作品の品の良さと余韻があるように感じた。

また、耳や鼻に綿を入れている子どもの描写も印象的である。この子が病気なのか、障害があるのか、作品中でははっきり説明されない。しかし、その「説明されなさ」が、かえって読者の想像を広げている。

志賀直哉は、何もかもを説明しない。むしろ、説明しないことで、行間に読者自身の感情や想像が入り込む余地を作っている。

この「行間に人間の心を浮かび上がらせる」という点では、『范の犯罪』や『剃刀』とも通じるものを感じた。

『范の犯罪』では、人は本当に自分自身を理解しているのかという問いが描かれ、『剃刀』では、人間の内側に潜む説明しきれない衝動が描かれていた。どちらも、人間の内面を明快に断定せず、「わからなさ」のまま提示している。

『網走まで』も同じである。この作品では、人間の悪意や衝動ではなく、「少し知りたい」「少し踏み込みたい」という、ごく日常的な感情の揺れが描かれている。しかし、その小さな揺れこそ、人間という存在の自然さであり、人間臭さなのだと思う。

志賀直哉は、人間を大げさに語らない。むしろ、列車の中のほんの短い時間や、葉書を投函するまでのわずかな行動の中に、人の感情の動きを静かに描き出している。

『網走まで』は、行間にあらわれる心の機微を味わう作品なのだと思う。

そう考えると、シチュエーションも含め、小林秀雄の『人形』に少し似ているようにも感じたが……

(おわり)

『網走まで』 読書感想文

バラフ(鼈甲)の櫛、縮緬の単衣(ひとえ)、丁寧な言葉遣いから、この乗り合わせた女の人は、今は小さな子供を抱え北に向かう哀れなシンママに見えるけれど、ちょっと前までは、それなりの暮らしをしていたのではないかと想像させる。

それにしても、お乳をあげたり、おむつを替えたり、お菓子をあげたり、忙しく落ち着かない描写の連続で、お母さんは大変だなあと思った。

この調子では、網走までろくに寝ることもできずに行くのではないかと、この富田靖子を思わせるお母さんを心配した。

男の子が尿意を訴える場面では、おしっこを漏らしてしまうのではないかとハラハラしたし、語り手は宇都宮で降りるのに、赤ちゃんを見ていることを引き受けたので、良い人だなと思った。

この子は生まれつき頭が悪いみたいなことを本人の前で言ったりして、七歳の男の子ならこういう無愛想な反応は普通だろうと思われるので、この男の子がこういった母親の自分に対する評価を案外根に持って、語り手が想像したように、この息子に母親が殺されるという未来もあながちなくはないと思った。

語り手は本当は、母親に託されたハガキを読んだのではないだろうか。ただそれを最後読者に明かしてしまったら、それまでこの親子について語り手が色々と勝手に想像していたことが消されてしまうもしくは本当になってしまうし、「シンママ」「網走」ハガキの宛名である「東京」「女名」「男名」という単語から物語を形作る余地を読者に与えて終わらせているのだと思った。

(おわり)

一語(一吾)一会

梅雨特有の湿気も相まってさらに「おつむ」が単純になってしまっている私は、作中の母子が網走に向かうと知っただけで、ドストエフスキーの『罪と罰』のソーニャが流刑されるラスコーリニコフとともにシベリアに行く場面を重ね、この人は刑務所の近くで子供と共に夫の出所を待つ為網走に向かうのだろうな、とそんな事どこにも書いていないのに想像してしまった。

現代なら8月の中旬、上野駅を夕方16時20分くらい発の東北本線に乗って、一応青森から北海道まではフェリーを使い、そこから鈍行を乗り継いで網走まで行くと何日くらいかかるのか？なんてことを考えていたら今度は頭の中に北島三郎先生の「風雪ながれ旅」が流れてきた。あいやあ～あいやあ～…

世間の休日に電車に乗ってみれば大概の人はスマホの画面を見入っている。ぼんやりと何かを想像していそうな人はあまり見かけない。ましてや電車内で赤児に乳房を与える母親なんて見たことがない。「現代は人の裸を隠す、禪一丁の工事夫も、電車の中で子供に乳を与える母親もいなくなった。そして都市化した現代社会は死を隠す」なんて養老孟司先生の著書にあった言葉を思い出し、また感想文が脱線している事に気づく。電車だけに。

以前は電車をはじめ公共の場で我が子に泣かれて、焦ってイラつくことが何度もあった。おむつが汚れたり、嘔吐されたり、私も妻も頭が大混乱になってしまった時に、名も知らぬ他人様から優しく声をかけてくださったり、吐物を一緒に拭いてくださった方もいたりして、寂しい冷たいばかりの世の中ではないのだな、と思った経験を当作品を読んで思い出した。

ちなみに我が子も私や妻に顔のパーツやら性格まで似ているけれど、私と妻は見た目も食べ物の好き嫌いも趣味もまるで違います。志賀直哉先生はそんなことも作品内で書いておられ、私は感心しました。

最後に、SNSを通じて政治家までもが「晒し」を行うような現代に生きる私は、語り手が母親から預かった二通の葉書を読まずに投函した場面がとても好きです。こういった思いやり、優しさというものもあるのだな、と感じた次第です。以上

(おわり)

志賀直哉 『網走まで』(新潮文庫) 感想文

聯想ゲーム

志賀直哉は、その初期の本作でも、観察と描写がすごいと思った。

冒頭の改札口の描写は、映画で言えばロングショットからミディアムショットのカメラワークだろう。鈴や鉄の音も聞こえ、人々の様子も見えるようだ。

(引用始め) 24 ページ

鈴が鳴って、改札口が開かれた。人々は一度にどよめき立った。鉄の音が繁く聞こえ出す。改札口の手摺へつかえた手荷物を口をゆがめて引っぱる人や、本流から食み出して無理に復、還ろうとする人や、それを入れまいとする人や、いつもの通りの混雑である。

(引用終わり)

上野駅午後 4 時 20 分発の青森行き。

「網走まで」というタイトルもいい。ロードムービーだ。

そして、汽車の中では、カメラフレームが主人公と親子に絞られ、彼らの姿がクローズアップされる。ときにカメラは、やや唐突に、主人公が聯想する女性の夫の顔までも映しだす。それは自分の学校にいた年上の曲木(まがき)という公家華族だというのだ(32 ページ)。最初は、この「妙な聯想(れんそう)」をなぜ書いたのだらうというひっかかりがあったが、あとでその理由がわかった気がした。

走る列車の中で男の子がトイレに行きたがる場面や、赤子が泣く場面などがリアルで、いちいち読者の共感を呼び、気が揉めた。

主人公は、志賀直哉本人さながらに、女性や子供を細かに見つめる。

主人公の目を通じて、我々読者もいっしょに汽車に乗り込んでいるかのようだ。

その細かい描写になにか意味があるのだらうと、わたしは何度も読み返してしまった。

そして、想像してしまった。

明治後期の北海道はどんな状況だったか？

子ども二人を連れて北海道まで行くのはきつい。

絵本を4、5冊も持ってきたら荷物がすごく重かったんじゃないか。

網走にはだれが待っているのか？

夫なのか？もし網走の刑務所に入っていたら、いっしょには暮らせないのでは？

女性は、結婚前はいい暮らしをしていたのに、嫁ぎ先でいじめられたのだらうか？

やはり家出をしてきたのだらうか。

ハガキの宛先は、男と女の二人だった。男はおそらく夫で、もう一人の女性はだれだろう。義母だろうか……。

などと、書いていないことまで、あれこれと想像を逞しくしてしまっていた。

本作をいっしょに読んでくれたある人が教えてくれた。

これは「覗き見」ではないのか、あの親子は読者の覗き見を誘うための「装置」ではないのかと。

あ！志賀先生に一本取られた！と思った。

いつの間にかわたしも覗いていた。

なにかの伏線かと思っていた四五冊の絵本も、女性の古いながらも高級な帯も、頭の鉢の開いた男の子も、二枚の端書も、単なる描写ではなく「装置」だったのかもしれない。それらの「装置」によって、読者の中に「覗き見る心」が芽生え、そこからさまざまな「聯想ゲーム」が始まっていたのか…。

そうだとすると、わたしはまんまとその仕掛けにかかっていた。あれやこれやと「聯想」していたのは、自分の野次馬根性からだったのだと気付いて、なんだかとても恥ずかしくなった。

（おわり）

「さよならあなたわたしは帰ります―志賀文学における凝縮の方向性」

(引用はじめ)

「自分は端書を持ったまま、駐車場の入口へ立った。其所には函のポストが柱にかかってある。

自分は、何んだかその端書が読んで見たいような気がした。若しもあの時―別れる時―これを見てもかまいませんかと自分が聞いたなら、女の人は必ず、「どうぞ」といったに相違ない。勿論自分は悲しい女の人の身の上を只好奇心で知りたがる男でない事は自らも信じている。自分はその女の人の悲しみにもっと同情がしたいのだ。若し自分が青森までの乗客であったならあの女の人は必ず自分に何も彼も打明けて話したに相違ない。口でこそ聞かないが、それをあの女の人から許されている者である。とこう思った。

然し何んだか心にとがめる。自分は少時迷った。然し遂に、函へ近よって一枚づつ、名宛を上にして投げ込んだ。投げ込むと直ぐ、出せるものならもう一度出して見たいというような気も、よかったというような気もした。

而して一枚づつ投込む際チラリと見た名宛は、共に東京で、一つは女、一つは男名であった。(完)(明治四十一年八月十四日)」

(志賀直哉全集第一巻「草稿 網走まで」454P)

(引用おわり)

言文一致の運動は完成しつつあり、それまでの経済生活の問題の観点から人間の内面に迫る小説から、専ら自身の感覚のみを拠り所にして人間の精神を拡大させていく文学が現れつつあった。「網走まで」の草稿の最終部分が決定稿で大幅にカットされた(初出時では「差し支えないというような気もした。若し、別れに、これを見てもかまいませんかと自分が聞いたら、女の人は屹度『どうぞ』と云ったに相違ない。自分は又悲しい女の人の上を只好奇心から知りたがる者でない事も信じている。若し自分が矢張青森までの乗客だったら女の人は恐らく何も彼も打ち明けて呉れたろう」という部分が残っておりこれも全集収録時などにカットされた)ことは、後の志賀文学における結晶性とは己自身の感覚と精神を極度まで尖鋭化させていく作業と一体であったことを確実にした。

また、決定稿第三段落「鈴が鳴って、改札口が開かれた。人々は一度にどよめき立った。鉄の音が繁く聞え出す。」の部分は、草稿では「間もなく、ガランガランという鈴がなって改札口が開かれた。人々は一度にどよめき立った。ビチンビチンという鉄の音が繁げく聞え出す。」となっており、しかもこの前に青森に向かう夫婦が登場するがこれも存在自体カットされている。無駄な登場人物と擬音を排することにより決定稿では、第三段落にて映画のワンシーンのように一息に場面状況が開かれ、読者の臨場感を高め文章の配置バランス的にも引き締まった効果が得られている。

そのあとの決定稿「巡査が厭な眼つきで」は草稿「警官がいやな眼で」とあり、この「眼つき」が後への伏線となっている。というのは、そのあとの「男の子は厭な眼で自分を見た」ここは決定稿草稿とも同じであるが、巡査は職業的な習慣から「眼つき」になっていったが、男の子には職業的な強制力はないが、暴虐的な父親の影響により長年の習慣的な「眼つき」まではいかないが「厭な眼」となり、それが主人公に悪印象を与え、劣悪な家庭環境の被害者としての母親の救済の必要性を訴えている。この際「男の子」は父親同様の悪の一統に属しつつあり、もはや更生は不可能ではないが困難であるという方向性だ。草稿では「女の人」への関心、親しみ、同情を強く、主観を押し出して書き込まれおり、これらを大幅カットし凝縮していく作業そのものが志賀文学の豊かな成果となった。

(おわり)

『網走まで』読書感想文

上野駅から宇都宮駅までたまたま相席になった母子に想いを馳せる物語。

語り手は、母の過去から息子の将来に至るまで、想像と妄想を膨らませていく。

この作品を読んで私が強く感じたのは、「人はなぜ鉄道に乗ると、物語に想いを馳せるのか」ということである。普段本を読まない人が車中で本を手にとったり、旅の出来事を旅行記に記したりするように、語り手であれ読み手であれ、人は鉄道という場で自然と「物語」を求めている。今回はその理由を、ベンヤミンとブルーストの視点から考察したい。

①ベンヤミンにおける「退屈」

(引用はじめ)

睡眠が肉体上の緊張解除の頂点であるとすれば、退屈は精神上的のそれである。退屈こそ経験と言う卵を返すの鳥だ。

(引用終わり)

ベンヤミン著作集 7 『物語作者』191 ページ

ベンヤミンは『物語作者』において、近代以降の物語(ナラティブ)の衰退を論じた。物語は本来、共同体における口承文化に根ざすものであり、語られる対象に深く同化し、自分なりに解釈しようとする態度に基づく。しかし近代では、新聞をはじめとする活字文化の普及により、語られる内容が「物語」から「情報」へと変質した。情報は即時的で説明済みであるため、他者への同化や解釈を必要としない。その結果、私たちの日常からナラティブが失われていったのである。

そんな情報過多で多忙な近現代人であっても、「物語」を回復する機会が残されている。それが「退屈」という精神的な緊張解除の時間である。物語を生むには、語られる対象に深く同化する必要があるが、そのためには自分自身を空洞化し、受容的な状態になることが求められるのだ。

一方、鉄道の乗車時間とは目的地へ向かう単なる手段に過ぎず、いわば「退屈な」時間に過ぎない。

本作の語り手が、相席の母子に深く想いを馳せられるのも、まさにこの「退屈」な車内という環境があったからだろう。

②ブルーストにおける鉄道と空間の断絶

(引用はじめ)

鉄道における目的地というのは、出発時にはほとんど観念的なものであり、また到着時にも観念的にとどまるので(中略)われわれは夢にさそわれ、町の名に要約される全体像として最初に思い描いた町のなかへと、劇場の観客よろしく幻想をいだきながら運ばれる

(引用終わり)

『失われた時を求めて』岩波文庫版第 9 巻 349-350 頁

引用箇所の前でブルーストは、自動車の旅と鉄道の旅を対比的に描いている。

自動車は道沿いの地続きの連続的な移動であるのに対し、鉄道の旅は駅から駅への「名から名へのワープ」のような空間の断絶を伴う。上野から宇都宮まで、駅以外の箇所に停まることなく疾走する浮遊感は、日常の束縛から人々を解放する。同時にこの空間の断絶という「欠落」が、想像力の余白を生み出し、人々に物語の受容と想起を促すのだ。

ベンヤミンとブルーストに共通するのは、鉄道の旅がもたらす非日常性と、それに伴って生まれる創造的なナラティブの可能性である。

彼らに言わせれば、旅の最中に日常の延長であるスマホを弄ぶことは、こうした創造の可能性を自ら放棄する行為にほかならないのだ。

（おわり）

究極と至高の読書感想文

世の中に「読書感想文」と名の付く文章は数あれど、完全無欠なる読書感想文を拝読できる機会はそうそうあるものではない。しかし先般、都内某所にある「美読書倶楽部」という会員制読書会の一室にて、究極の読書感想文と至高の読書感想文の対決が執り行われ、その一部始終を覗き見することに成功した。そこで今回は究極と至高の読書感想文および双方の対決結果を以下にお伝えさせて頂く次第である。

【課題図書】

網走まで／志賀直哉

【究極の読書感想文】

生活していると時おり誰かの機微に触れるということがある。ここでいう「機微」自体は他者による感情であり、そこに「触れる」のは我々自身であるから行為の主体は当然ながら我々ということになる。それだから他人の奥に潜む心の動きを捉えること自体は可能ではあり、そして行為者自らの腑に落ちていくことになる訳だが、とはいえ機微の妥当性は依然として不明である。本書『網走まで』は「語り」という行為における主体である「自分」が、車内で偶然居合わせた親子に抱く取り留めのない事柄が描かれており、つまり機微に触れる小説である。といって機微を直截に描いてはその対極である野暮へと成り果てる。機微は激情ではない。だから著者は決して野暮ではない。「触れる」という事が肝心なのである。例えば、作中において唐突ともいえる <<この母は今の夫に、いじめられ尽して死ぬ>> という冷徹な予期であるとか、下車の際における <<「ハンケチがよれていますから……」>> と先程とは打って変わって顔を赤らめた後、母の葉書を <<読んでも差し支えがない>> というふとした考えを抱いたり、主体である「自分」が、見ず知らずの母、その幼い子供、網走、葉書、母の言葉遣い、御納戸色の帯、といった僅かな他者の要素を自らの意のままに捉えた結果として母は死ぬ(殺される)のであり、そうした他者は他者であり主体は自身であるという点を改めてみれば母が死ぬのは自然な成り行きなのであって、それは主体が抱く母の機微によって死は担保されている。こうした主体である志賀がふと機微に触れ、そして思惟するということはこれ即ち、一つの生命としてこの世に存在するという自らを書を通じて志賀自らで確かめているかの様ではある。がしかし、その表現の体系についてロラン・バルトの言葉を借りれば、エクリチュール(Écriture)の段階に留まっているため、スタイル(Style)へと研ぎ澄ます精進を怠ることのないよう、志賀はこれからがんばって小説を書いたらいい。

[以上]

【至高の読書感想文】

今、貴様の書いた究極の読書感想文とやらを読んだが相変わらず愚かな奴め。機微に触れる？エクリチュール？馬鹿め。独りよがりの妄想も大概にしろ。大の男が機微機微機微機微とやかましい。機微マニアか貴様は。では、私の感想についてだが感想文を書くことそれ自体がおこがましい。なぜといって志賀氏の文学は我が心を打ち、今こうして多種多様な感動が逡巡してやまないのであるからな。これをどうして文章にできよう。それにも関わらず貴様ときたらあの志賀氏に対してよくも偉そうに「志賀はこれからがんばって小説を書いたらいい」などと講釈を垂れたが、講釈どころかそもそも解釈なんぞ挟む余地なし、志賀氏はただ文章を書いて私はただ感動した。これ以上に何があるというのだ。芸術家の分限を図ろうとする貴様の行為こそが野暮の骨頂なのだ。志賀氏が書いただけでこの小説には価値がある。よってこの勝負、読書感想文を書いた時点で貴様の負けは決まっていたのだ。今すぐ出て行けこのたわけ者が！

[以上]

【対決の結果】

至高の読書感想文の勝利

といったことを考えながら、ぼんやりしていたところ「美味しんぼにハマってるだけやんけ」という誰かの声が聞えてきた。

以上

（おわり）

文学日本代表のオフサイドライン

夏目漱石の『それから』の 13 章に、三千代の父が株式投資に失敗して北海道に渡り、当地での生活に困窮して彼女に金の無心する手紙をよこしたことが描かれている。

『それから』1909 年頃の話であり、『網走まで』は 1908 年(明治 41 年)発表である。

1904 年に始まった日露戦争の戦争特需とその後の戦勝景気でバブルとなったが、1907 年に株価が急落。多くの人々が損失を抱えたようだ。

『網走まで』の汽車で乗り合わせた女性も、夫が株で失敗して、北海道に渡ったのかもしれない。

なんとではなく、この作品は『それから』の代助と三千代を彷彿とさせる。たまたま汽車で乗り合わせた子連れ的女性との淡い交流を描いているが、代助と三千代の関係が、単なる再会にとどまらず、三千代のモーションによって、魚心あれば水心という平仄で、不倫に発展していくように、『網走まで』の語り手と女性との関係はなかなか生々しい

(引用はじめ)

「一寸、待って……」女の人は顔を引いて、無理に胸をくつろげようとする。力を入れたので耳の根が、紅くなった。その時、自分は襟首のハンケチが背負う拍子によれよれになって、一方の肩のところに挟まって居るのを見たから、つい、黙ってそれを直そうとその肩へ手を触れた。女の人は驚いて顔を挙げた。

「ハンケチが、よれていますから……」こう云いながら自分は顔を赧めた。

「恐れ入ります」女の人は自分がそれを直す間、ジッとして居た。

自分が黙って肩から手を引いた時に、女の人は「恐れ入ります」と繰り返した。(P.35)

(引用おわり)

電車の席で相席しただけ見ず知らずの男に、赤ん坊を預けたり、葉書の投函を依頼するというのは、相手の男によほど好感を持っていなければ、しないことのような気がする。

まして、襟首のハンカチを直させるというのは、好感以上のものがなければ、させないような気がするが、考えすぎか。男の私が最近つくづくイケメンであると思うサッカー日本代表 DF の谷口彰悟ような好男子だったら成立するような気がするが、林修氏がテレビで「志賀直哉の文学はモテる男の文学だ」というようなことを言っていて、印象に残っている。そう、この語り手の男はやはり、20 代後半の既婚のイケメン志賀直哉である。

この作品には、網走までの心細い旅路で、信頼できそうなこの男性に思い切り甘えてみたいというような女の人の心の奥底にある欲望の疼きが感じられてる。こういう役どころなら女性のキャスティングは、黒木華。黒木華のしたたかなモーションはあなどれない。その地味な容姿ににじみ出る生活感や目の前で授乳してくる隙だらけの言動とは裏腹に、既

婚者のディフェンスラインの裏をいつも狙っている。ディフェンスラインを下げれば、御納戸色のキラーパスがとんてくるゾ！

黒木華の心の奥底の疼きを感じ取りながらも、プレスを掛けつづけ隙を見せない谷口彰悟。この二人のスリリングなマッチアップを抑制して描いている所が、心憎い。

イケメンなのにディフェンスラインは潔癖、預かった葉書を盗み読みしたせいで、相手に裏を取られ失点などということはありません。日本文学代表の最終ラインは、本日に至るまで固い。

（おわり）